

装置で見られるようになっている。同じ原理で、切崖面図や谷埋め図なども立体画像化することができる。

この装置は、最近では自然災害予測などによく使われている。例えば、土石流などによる山地斜面地形の変化を予測するのに、格子点の高度だけでなく、地質や植生、土壌などのデータを入力しておき、これに一定量の降雨があった場合にどのような変化が起こりうるかを、立体アニメーション画像として表現することが可能になっている。自然災害だけでなく、都市型災害のような人為的

災害の予測にも役立つだろうと思われる。

ところで、A大学地理学教室には人文地理学担当のE教授とF助教授がいるが、ともにアンチ・コンピュータ派で、20年前とほとんど変わらない教育方法を堅持している。しかも、学生の人気はB教授やC教授よりも高いのである。生まれた時から、やれパソコンだOAだといったテクノロジー万能の世の中を経験してきた彼らにとっては、大学での授業時間くらいはせめて息ぬきの場としたかったのかもかもしれない。

## セベリア雑感

栗原尚子

1980年12月初めから1981年2月半ばまで、海外学術調査でセベリアに滞在したときのことである。スペインを訪れるのは3度目であったが、plurinacionalと形容され、多様な「地域」によって特徴づけられるこの国にあって、前回の調査地域カタルーニャとはひじょうに異なり、ある意味ではスペイン的なアンダルシアで生活できるという期待は大きかった。現在のセベリア市は人口30万人。これといった工業活動がなく、グアダルキビル川流域にひろがる農業地域の中心町であるが、かつては、ラテン・アメリカとを結ぶ表玄関であったことはよく知られている。このラテン・アメリカとの歴史的つながりを現在象徴しているのは、古文書館である。著名なHamiltonが、この史料を使い、新大陸から搬入された金・銀の量を産出したことはよく知られている。古文書館に利用されている建物は、かつてセベリア商人の活動の中心であった取引所で、王宮アルカサルや大寺院に近接している。この中心地の北側には、かつてのシナゴグであるサンタ・クルス地区があり、この街区の一角にあるアパルタメントが、セベリア市での居屯地となった。迷路のような街路からなる歴史的なこの街区は、観光の対象であり、多くの観光客が訪れるが、滞在期間中はオフシーズ

ンのため、それほどのにぎわいを示してはいない。それでも窓の下に時々日本語がとびかっていることもめずらしくはない。セベリア市での仕事は、調査地であるシェラ・モレナ山中のカサージャ・デ・ラ・シェラに関して、関連機関との接触と関係資料の収集にかけずりまわることであった。資料・文献収集では、セベリア大学文学部の地理学教室を利用させていただいたが、この建物は、王立のタバコ工場であったところで、かのカルメン活躍の場として知られる。セベリア大学の地理学教室の歴史は古くはない。初期には、農業経済史家として優れた研究業績を発表しているA. M. Bernalが地理学を担当していたこともあり、研究成果がスペインの最も代表的な学会誌Estudios Geograficoに寄稿されている。

仕事の合間をぬっての楽しみは、街の中を徘徊することである。丁度オレンジがたわわに実をつけている時期で、街路のオレンジを見あげていると、これはママレードにしかならないよと声をかけられた。アパルタメントでの生活は、スペインでの初めての自炊経験で、近くの乾物屋、八百屋などで近所のオバさん達にまじわり、井戸端会議をたち聞きしながら買物するのが楽しみのひとつになった。八百屋で、日本人はこれが好きだろう

と白菜を出された時は、思わず飛びついたものである。外で食べ歩くことは嫌いな方ではないけれども、夜ひとりでレストランに行くのは面倒になることもあるし、それ以上にあのスペイン料理の量にいささか参ることが多い。スペイン人といえど毎食あれだけのものを食しているとは思わないけれどもかなりの胃の許容力がないとつきあえない。

い。もうひとつの楽しみは商店街の目だけのshoppingである。しかし、日用品の多くは、日本でもおなじみの、多国籍企業の製品が多く、いかに地方都市といえどもセビリアぐらいの都市となると、一時的な生活者にとっては、東京と大きく変わらないといえる。もっと農村のまちに行くとそうはいかないが。

## アキレス腱

武田 むつみ

まさに青天の霹靂でした。6月27日、いつもの日曜日のようにいつもの体育館でバドミントンをしていました。基本練習が終わって軽い試合をしていた時のこと、シャトルを打とうと右足を踏み出した瞬間、足首に何とも言えぬひどいショックを感じて倒れてしまいました。何かに激突したのかと思わず周囲を見回しましたが、たゞ平らなコートに私が倒れているだけ。恐る恐る靴を脱いでみると足首のいつもあるはずの腱の部分へこんでしまっています。のぞきこんだ皆が“ヤッター!!”。私も何事もないはずがないとは思いましたが、痛みは最初だけで消えてしまうので、祈るような気持ちで医者を訪ねました（アキレス腱の場合、ここで動かさないことが肝腎です）。しかし、医者は事もなげに手術の宣告を下し、翌日入院という羽目になりました。これできょうの夕飯も、明日の大学も、夏休みのイスラエル旅行もすべてオジャン。事故とは全く思いもかけず突然に起こるものです。卒業後初めてのフル勤務の緊張がようやく解け、一方では疲れがたまっていたのかもしれない。それにしても……いくらグチっても後の祭。右足をスッポリギプスで固められて松葉杖生活が始まりました。

入院して3日目の手術は腰ツイ麻酔のおかげで大した痛みもなく終わりましたが、丸1日の絶食、毎日の点滴は健康だった私をまるで病人のような気分させます。1日3回の検温、その度に気分を尋ねられると、いつもあまり省みない自分の身

体にいやでも注意せざるを得ません。炊事をしなくても食事ができ、寝ているのが仕事などという生活に普段は大いに懂っていたものですが、実際それしかできなくなってみると全くシンドイものです。それでも1週間で抜糸、退院という医師の言葉を信じ、ひたすらおとなしく待ちました、というよりギプスをはめた足は下へおろすと血がどんどん下がって膨れあがるような気がして、トイレへ行くのがやっとうという状態、それもなるべく回数を減らしたいので極力飲まずにいたら、注射の時“あなたしなびてきたわよ”と言われた程でした。

ところが、手術後の痛みが消える頃から傷口付近が異常にかゆくなってきました。消毒薬とテープ、石こうによるかぶれです。薬を塗った部分全体が大きな水泡になって“こんな皮膚の弱い人は初めて”とのこと。そこへ追いうちをかけるように身体中に抗生物質による薬疹、微熱が続き、気が狂いそうにかゆく、ギプスの中の足も真赤にはれあがってとうとうせっかくはめたギプスもカットすることになってしまいました。退院の“タ”の字の話もないまま1週間、10日、2週間と日が経ち、イライラは増すばかり。発疹がだいぶおさまった18日目に強引に頼みこんで退院してしまいました。家へ帰っても松葉杖ではかえって大変なことも多いのですが、何しろ気分が大違いです。病院で一番辛かったのは夜が長いこと。4時半夕食、9時消灯ではいつもの生活とあまりに違いが大き